

※注 主な遺跡用語

たて あな じゆう きょ あと 竪穴住居跡

力持遺跡で見つかった家の跡（住居跡）は、地面を円形・楕円形・長方形・卵形などのかたちに50～100センチほどに掘くぼめて、ふみかためるなどして床を作り、柱穴や溝を掘ったのちに屋根を掛けた半地下式の竪穴住居と呼ばれるものです。今回見つかった竪穴の中央あたりには土の焼けた部分があり、火を燃やした炉（囲炉裏）の跡であることがわかります。力持遺跡では一辺の長さが3メートル程度の小形から10メートルをこえる大形までさまざまな大きさの家が見つっています。

一軒の家の跡をみると、コンテナ30箱分以上に上る多量の土器（ほとんどが破片）や石器が出ることが珍しくありません。おそらくは古い家が使われなくなり（廃屋）、壊れていなくなった土器や石器が捨てられるようになったのでしょう。

しょう ど い こう 焼土遺構

地面で火を焚いた跡で、土が赤色化して見つかります。力持遺跡で見つかった焼土遺構は、周囲の状況などから判断して、野焼きを行った跡ではなく、竪穴本体は消失した竪穴住居跡の一部であった可能性が考えられます。

しょう ど こう フラスコ状土坑

理科の実験などで使われるフラスコに形が似ているためこの名がついた穴です。力持遺跡では、直径1～3メートルのフラスコ状土坑が調査区西側の斜面地に密集して見られます。竪穴住居と比較して土器などの物の出が少なく、用途は厳密にはわかりませんが、岡山県山陽町の遺跡からトチやクリなどの木の実類が見つかった事例などから判断し、食料を貯蔵するために掘られたと考えられています。

しょう せき れっ せき 集石・列石

大きめの石や形を整えた（整形）石を意図的に集めたものを集石、石を連ねるように配置するものを列石と呼び区分しています。何のために作られたのか厳密にはわかりませんが、お墓に関係する施設と考えられます。



有名な青森県青森市の三内丸山遺跡で多量に見つかった土器は円筒式土器です。土製品は、ミニチュア土器（大きさが7センチほどの小型の土器）、土偶、土製耳飾り、円盤状土製品などが発見されています。石器は、石鏃、石槍、石匙、石錐、削搔器、磨製石斧、半円状扁平打製石器、石皿、磨石、敲石など、多種多様なものが見られ、石製品は、扶状耳飾り、ペンダント、有孔石製品、石冠、石刀、軽石製品などが発見されています。また土器や石器に混じって、ヒスイ製のペンダント一点、黒曜石製の石器、コハク片など特殊な石材が見つっています。ヒスイの産地としては、富山県糸魚川流域が有名ですが、あるいは富山県から遠路はるばる持ち込まれている可能性もあります。黒曜石は分析の結果、青森県西津軽郡木造

町と若手県栗石町小赤沢地区産であることがわかりました。縄文時代の力持人が、よその地域と交易を行っていたことを示すものです。コハクについては、久慈市や野田村が日本有数の産地ですが、わが普代村のどこかに鉱脈が眠っている可能性が高いと思われます。縄文時代の力持人にぜひ場所を聞いてみたいものです。

縄文時代の力持ムラは、当初の予想をはるかに超えて大規模であることがわかり、当時の集落の全体像が次第に明らかになってきました。当時の力持ムラの生業や交易を考えたとき、背後には食料となる獣が棲み、木の実が豊富にとれる山を持ち、近隣にサケ、マスが遡上し、飲み水にも困らない川が流れ、そして海岸に近いという恵まれた

場所であったことは、容易に想像されます。これらのことから、力持の地が現在だけでなく、昔から人々にとって住みやすい場所であり、人々が自然環境に準じて生きていたことの証です。

恵まれていた集落



復元された土器に見入る参加者たち（11/16現地説明会）